

メコンデルタ 雨林紀行



第二回国際沈香 会議に参加して

梅栄堂 営業本部長
中田 恭三朗

夏のベトナム中部への旅に続いて、二〇〇三年十一月中旬一週間にわたってホーチミンとチャウドックで開催された国際沈香会議に出席することとなり、再びベトナムにやってきました。

沈香は世界で稀に見る高価な自然産物であり、そのために天然林内にある沈香の伐採が続き、いまや絶滅の危機に瀕している。オランダに本部のある熱帯雨林プロジェクト財団（TRP）は、七年前から、天然林内の沈香絶滅を食い止めるよう活動を続けてきた。

具体的には、「ヨーロッパ共同体と財団への寄付金を利用し、ベトナムに沈香の植林地を造成して、人工林の沈香から樹脂

成分の生成を促進させる技術を開発すること」が主な活動だ。そして今回、財団と提携している越・米大学と共催で第一回国際沈香会議が開催される事となった。ホーチミンのマジネスチックホテルに欧米・中近東・アジア・オセアニア各地域から二十四、五カ国約九十名が出席、二日間にわたって研究発表が続く。日本からは京都大学研究グループ、同業者一社、そして梅栄堂からは私が出席。プレゼンテーションは全て英語での発表だ。日本語の同時通訳もあるにはあったが、こちらの日本語を聞いているほうがかえって疲れる。夕食時には各国の参加者と情報交換をする。沈香の世界はまだ狭いもので、すぐに共通の話題にたどり着く。アラブの商人は、最近の若者は沈香の香りよりも花の香りや香水が好きになり、商売がやりづらいつつ、日本と同じような事をいっていた。各国の森林局や大学からの研究発表は、植林沈香に

関してのものが多し。勿論、民間の業者も沈香の植林に大変関心を持っている。タイのある業者は沈香の植林を考えており、この会議に出席して植林栽培について勉強し、何とか実現させたいと言う。そして、もし沈香が出来たら真っ先に梅栄堂に品質を見て欲しいと熱弁を振るっていた。

メコンデルタへ、沈香買取の旅

三日目はバス三台に分乗し、現地調査のためチャウドックへ出発だ。チャウドックは、メコンデルタにあるカンボジアとの国境の町だ。途中一回の休憩、食事を挟んで、バスはただひたすらメコンデルタの中を四〇〇km、八時間かけて走り続けた。

次の日は今回の旅で私が一番楽しみにしていた場所、TRPの運営で沈香を植林している NUI QUAN 山（標高五〇〇m）に

入る。一緒だったバプア・ニューギニアから来た女性は裸足でどんとと先へ行く。約二時間急な山を登り、植林の沈香を見学し、植林後三年を経過した沈香を、実際に伐採、樹脂の有無を確かめる。

い香りがした。その後バスで苗を育てている場所へ。発芽して数ヶ月の苗が数万本温室のような所で育てられている。京大伊東教授曰く、「今まで出席した国際会議とは異なった大変ユニークな会議である」とのことだ。

沈香の大切さを実感

六ヶ月前にドリルで穴を開けて、化学薬品を流し込んであるのだ。穴を開けた場所周辺は茶色くなっており、真ん中は腐って変色をしているが、その周りにうっすらと樹脂がついている。その後は輪切りにした木を山から運び出す。山道は雨でドロドロ状態。岩場も多く何回もスリッパして尻餅をつき、手の肘を擦りむく。この体験で、ここ

アジアで開催されるたいていの国際会議では参加者の六〇%以上は日本人で占められていることが多いが、今回の国際会議には日本人は少なく、海外の沈香の主な専門家ほとんど出席していた。この国際会議に出席できたことは、たいへん意義があったと思う。



香りの小部屋



植林三年後の沈香木を伐採 ▶

が本場に Rain Forest（雨林）であることを十分実感した。全身、雨と汗でずぶ濡れになりながら、やっと麓に到着。昼食は現地の案内人と一緒に郷土料理を楽しむ。次から次へと色々な料理が出される。山で切り倒した沈香樹をさらに細かく切る。一部沈香の部分があり焚けば甘い良

線香メーカーも当然来るべき会社が来たという感じ。この会議を境に沈香の世界が変わるのではないか。親しくなったシンガポールやインドネシア、ヨーロッパ系の人達からも色々な沈香・白檀についての裏話を聞くことが出来て、なかなか興味深かった。



▲沈香樹脂が早くできるように処置された沈香木



▲栽培されている沈香の苗木

この会議に参加して、沈香樹が今までに想像以上に乱伐され、種類によっては絶滅の危機に瀕しているのがよくわかった。また、日本文化でも沈香は大変貴重な香木で、昔から香道の世界では「馬尾紋足」と言われるように大切に扱って来ている。我々としても今後も大切に扱って行きたいとつくづく実感させられた。今後、沈香の植林事業が成功して安定供給されることを強く願っている。（終り）

会議参加者のディナーパーティー ▶

